

外交史料館所蔵外務省記録総目録 戦前期

第1巻〔明治大正期〕、第2巻〔昭和戦前期〕外務省
外交史料館編 東京 原書房発行
1992. 10 B5判 456p、368p、各冊18,000円

外務省外交史料館は、平成3（1991）年4月、開館20周年を迎えた。その開館20周年記念事業の一環として刊行の運びとなったのが、「日本の政治・外交、さらに経済・司法・文化等、広範囲にわたる海外との交流の歴史を刻む第一級史料にたどりつく最良な道しるべ!!」（同書「オビ」より）『外交史料館所蔵外務省記録総目録 戦前期』全3巻である。ここでは既刊分第1巻と第2巻を紹介する。

第1巻と第2巻に収録されているのは、外交史料館で公開されている戦前期の資料である。外交史料館が所蔵する戦前期の外務省資料の簿冊5万冊の簿冊名が、この目録にすべて収録されている。本書の刊行により人々は、外交史料館まででかけなくても、そこにどんなものがあるか、自分は何を見たいか、およその見当をつける事ができるようになった。

利用者の立場で考えてみよう。外交史料館は文書館だから、行けば現物を手にとることができる。だが外交史料館に行って初めて目録を見るというのと、出かける前にあらかじめ目録を検討し、情報を把握した上で外交史料館に行くのとでは、能率がまるで違う。能率だけではない。予備知識の多少は、現物に

あたったときの喜びの大小にもしばしば正比例する。予備知識なしでは、「本物」で実感できる感動や印象も限定されてしまう。反対に、現物にあたるまでに十分な予備知識を持っていれば、「本物」に触れたことで、強い印象を得ることが多い。

文書館の立場では、所蔵資料の概要を非来館者にも把握して貰える目録の存在は、大きな魅力である。資料の存在とその価値の高さを広く普及し潜在利用者を顕在化するために、こうした目録の存在意義は大きい。

本目録の入手手続きが容易であることも、ポイントだ。原書房発行で、書店経由で入手できる。「有償領布」の煩瑣を避けたのは、外交史料館の見識と、利用者に対する配慮であろう。値段は1冊18,000円、ちょっと遠方の利用者には、交通費より安い。

内容構成は2冊とも、「刊行にあたって」「凡例」「外務省記録について」(いずれも同文)が巻頭に配されている。次に目次でその冊の分類体系を示し、目録本文が表形式で続く。

「凡例」「外務省記録について」には、外務省における記録保存の伝統と、その方法論、分類体系がわかりやすくまとめられ、外交史料館の所蔵資料が出所原則に基づき整理されていることが、ここから知られる。

ただ、外交史料館の利用経験のない者にはこの目録本文のどれが外交史料館の閲覧請求に関わる情報なのか判然としない点は惜しまれる。いや、「各記録ファイル検索のための索引の他、…参考となる諸資料を収録した」(凡例2.)別巻が未刊行の平成5年中旬の今、こう言い切るのは乱暴すぎる。別巻の発刊が待ち遠しい。 小川千代子・国際資料研究所